

# 育児期の母親の育児不安を規定する要因

## —自尊心感情、キャリア選択の希望との関連—

教育デザインコース 家政領域 平成 27 年度修了

飯田麻衣子

教育学研究科

園田 菜摘

### 問題と目的

#### 1. 母親の育児不安

近年は、男女共同参画社会の流れを受けて、以前に比べ多くの育児期の母親が社会参加、仕事復帰しており（厚生労働省, 2015）、特に育休を利用し、継続就業している割合は年々増えている（厚生労働省, 2010）。母親が希望して社会に出ていくことが可能になりつつある世の中は、一見、母親にとって生きやすいものになったと思われる。しかし、少子化や核家族化などの影響を受け、「子どものことがわずらわしくていららしてしまう」「子どものことでどうしたらよいかわからなくなる」といった育児への負の感情を半数以上の母親が持つ（ベネッセ教育総合研究所, 2015）など、母親を取り巻く育児の状況は多くの問題を抱えている。このような母親の育児不安や育児ストレスが解決されずにおざなりになったままだと、育児意欲の低下や生活満足度の低下、抑うつなどのメンタルヘルスの悪化につながることが指摘されている（牧野, 1982; Crnic & Booth, 1991; 佐藤ら, 1994）

#### 2. 育児不安を軽減する要因

##### (1) 外的な要因

育児不安を軽減する要因の一つとして、社会的なサポートといった外的な要因が挙げられる。「家族以外の人と子どものことについて話す機会の有無や人数」「夫と話す時間の量」「自分の母親からのサポート」、母親が有職の場合は「母親の職場におけるサポート」などは育児不安の解消に有効とされているが（牧野, 1982; 酒井ら, 2014; 八重樫・小河, 2002）、社会的サポートはその効果が限定的であるという指摘もあり（高橋・佐野, 2010; 富田・二宮, 2014）、サポートさえあれば母親の育児不安を解消できるとはいえないだろう。

また、先行研究（園田, 2012）では、母親から見た父親の育児・家事参加が少ないと母親の育児ストレスが高いことが示されており、母親にとって父親がどれだけ積極的に育児に関わっているかを評価することが重要であると考えられ

る。また、父親が育休を取得することは育児における役割逆転の機会であり（菊地・柏木, 2007）、父親が積極的な育児をしていることの表れであると考えられる。しかし、育休取得率は2%前後（厚生労働省, 2014）とまだまだ低いことから、抜本的な育児不安の解消の要因とはなっていない。

##### (2) 内的な要因

育児期の母親の仕事復帰が増え、母親が多様なライフスタイルを選べる現代においては、外的な要因だけでなく、母親がなぜそのようなライフスタイルを選び取ったのかという心理的な要因についても掘り下げていく必要があるだろう。これまで母親の内的な要因に着目した研究は少ないが、中でも自尊心感情に着目した研究においては、母親の自尊心感情は子ども・子育てへの肯定感と子育てへの否定感（佐藤, 2013）、養育態度（加藤・中島, 2011）に関連することが示されている。自尊心感情は大人の場合、長期的スパンで見ると高低が変動することのない安定的な心理的指標であり（Kugle, Clements, & Powell, 1986）、その人の社会的適応を左右する重要な要因であるとされているため（菅, 1984）、育児期の母親の自尊心感情についてさらに検討を進め、母親の育児意識にどのような影響を与える要因なのか、詳細に調べる必要があると考える。

#### 3. 育児期の母親のキャリア選択の希望

これまで、有職の母親と専業主婦の母親といった母親の就労形態の比較を行った研究においては、専業主婦の母親の方が有職の母親より育児不安が高い（宮本ら, 2000 など）という結果が示されている一方で、専業主婦の母親とパートタイム、フルタイムの母親の育児不安には差が見られない（八重樫・小河, 2002; 富田・二宮, 2014）という矛盾した結果も示されており、単純な就労形態だけでは母親の育児不安を説明できないのが現状である。そこで近年、母親の育児不安に影響する要因として、母親がどのような就労形態を希望しているか、というキャリア選択の希望に関する研究が新たに行われ始め

ている。富田・二宮（2014）は、専業主婦や有職といった現在の就労形態そのものではなく、現在の就労形態が希望通りのものであるかどうか、母親の育児負担感や抑うつ傾向に関連することを示している。しかしこの研究では、母親が育児を行っている最中である現在の時点での希望の実現度しか尋ねておらず、現在の就労形態に至る過程においてどのような選択をしてきたのか、将来のキャリア選択の可能性をどのように捉えているのか、といった母親の流動的な心情を的確に把握できているわけではないという問題が残る。

現代の母親は、育児さえしていればそれで満足というわけにはいかず、自分の職業的キャリアを守るために育児休業を取得して仕事を継続することを希望する母親、子どもが幼い頃は仕事を辞めて育児に専念し、将来は自分の職業的キャリアを築いていきたいと希望を持つ母親、育児と仕事をバランス良く両立していきたい母親と実にさまざまなはずである。年齢層別に見た日本の女性の労働力率は、20代半ばと50代前後という二つのピークを持ついわゆる「M字カーブ」を描くことが特徴的に見られる（内閣府、1996）。これは、妊娠・出産期や育児期にあたる頃に多くの女性が離職することで労働力率が急激に下がり、育児がひと段落する頃に仕事を再開していく様相を示しており、日本の女性の継続労働の難しさを表している。近年、育児期世代の女性の労働力率が増加してきたためにM字の底辺値が若干浅くはなっているが（内閣府男女共同参画局、2013）、諸外国と比較すると出産前後を含む育児期世代の女性の労働力率は未だ低いのが現状である。母親が労働から離れる妊娠・出産期にどのようなキャリア選択の希望を持っていたのか、また子育てがひと段落して仕事復帰することを希望する時期に、どのようなキャリアを選択したいと思っているのかを検討することは、大きな分岐点と言える過去と将来の2時点において、自分の人生と家庭生活のバランスをどのように捉えているかという母親の実際の心情を探ることにつながると考えられる。

#### 4. 本研究の目的

以上のことから、本研究では育児期の母親の自尊感情とキャリア選択の希望を取り上げ、フルタイム、パートタイム、専業主婦といったそれぞれの就労形態において、このような母親の心理的要因や妊娠・出産や子育てに伴い流動的に変化する可能性を持つキャリアに関する希望の内容が、現在の母親の育児意識にどのように関わり合っているのかを明らかにすることを目的とする。

#### 方法

##### 1. 調査対象者

首都圏Y市の私立保育園4園、認定子ども園を併設する私立幼稚園1園に在園する3歳から6歳の園児の母親を対象とした。同じ園に複数子どもがいる場合はより年長の子どもを対象とした。

##### 2. 調査手続と調査内容

質問紙は2015年7月上旬に私立保育園、私立幼稚園に園を通じて配布し、7月中旬に園を通じて回収を行った。配布は453部、回収は304部（回収率67.0%）だった。質問紙により、基本的属性、育児不安、自尊感情、仕事満足度・満足および不満の理由（有職者向け）、働いていない理由（専業主婦向け）、キャリア選択（妊娠・出産時および将来）の希望、キャリア選択の希望実現度（妊娠・出産時および将来）とその理由、子育てがひと段落すると思う時期、生活満足度について尋ねた。本研究では、これらのうち基本的属性、育児不安、自尊感情、キャリア選択（妊娠・出産時および将来）の希望について検討するため、該当項目において有効回答が得られた268部を対象とした（有効回答率88.2%）。

##### 3. 分析対象の基本的属性

本研究の対象となった母親の平均年齢は37.6歳で、学歴は中学卒1.9%、高校卒12.3%、専門・専修卒24.3%、短大卒21.3%、大学卒36.6%、大学院卒2.2%、不明0.7%だった。母親の就労形態については、フルタイム（週5日、1日平均実労働時間6時間以上のフリーランス、自営業も含む）36.9%、パートタイム20.9%、専業主婦42.2%だった。家族形態は核家族が94.4%、拡大家族が5.6%で、ほとんどが核家族だった。子どもの月齢は平均58.6ヶ月（範囲36～76ヶ月）で、男児51.1%、女児41.8%、不明7.1%だった。子どもの所属は、保育園38.1%、幼稚園23.5%、認定こども園37.3%、不明1.1%だった。

##### 4. キャリア選択の希望の測定

本研究では、キャリアを「職業的な経歴、経験」と、「育児や家庭生活における経験」の双方を指すものとし、母親が「妊娠・出産時」にどのようなキャリア選択を希望していたのか、また、母親自身が子育てがひと段落すると考える「将来」にどのようなキャリア選択を希望するのかについて測定を行った。

### (1) 妊娠・出産時

妊娠・出産時に母親がキャリア選択についてどのような希望をしていたかについて、Table 1 の項目から最も当てはまるもの一つを尋ねた。その結果、回答の比率が少なかった項目（4.0% 以下）を除外し、フルタイムの母親は「①

仕事継続・変更なし」、「②仕事継続・変更あり」の2群、パートタイムと専業主婦の母親は「①仕事継続・変更なし」、「②仕事継続・変更あり」、「③退職後専業主婦」、「④専業主婦継続」、「⑤専業主婦後就業」の5群に分け、それぞれ以降の分析に用いた。

Table 1 妊娠・出産時のキャリア選択の希望の比率

妊娠・出産時のキャリア選択の希望	項目の内容	フルタイム	パートタイム	専業主婦
①仕事継続・変更なし	仕事を辞めず、産休・育休などを使って、同じ仕事を続けるつもりだった	72.7% N=72	23.2% N=13	10.6% N=12
②仕事継続・変更あり	仕事を辞めず、産休・育休などを使い、職種や時間を変えて働き続けるつもりだった	17.2% N=17	19.6% N=11	9.7% N=11
③退職後専業主婦	仕事を辞めて、専業主婦になるつもりだった	4.0% N=4	19.6% N=11	40.7% N=46
④専業主婦継続	専業主婦だったので、そのまま専業主婦を続けるつもりだった	1.0% N=1	16.1% N=9	24.8% N=28
⑤専業主婦後就業	専業主婦だったが、出産ののち、働き始めるつもりだった	3.0% N=3	16.1% N=9	9.7% N=11
該当無し	その他、無回答など	2.0% N=2	5.4% N=3	4.4% N=5

注：分析に用いた項目を□で示した。

### (2) 将来

将来、子育てがひと段落する頃に、母親がキャリア選択についてどのような希望を持っているのかについて、Table 2 の項目から最も当てはまるもの一つを尋ねた。その結果、回答の比率が少なかった項目（4.0% 以下）を除

外し、フルタイム、パートタイムの母親は「①仕事継続・変更なし」、「②仕事継続・変更あり」の2群、専業主婦の母親は「④専業主婦継続」、「⑤専業主婦後就業」の2群に分け、それぞれ以降の分析に用いた。

Table 2 将来のキャリア選択の希望の比率

将来のキャリア選択の希望	項目の内容	フルタイム	パートタイム	専業主婦
①仕事継続・変更なし	現在、仕事をしているが、将来も職種、働き方を変えずに、働き続けている	51.5% N=51	28.6% N=16	—
②仕事継続・変更あり	現在、仕事をしているが、将来は職種や働き方を変えて、働き続けている	44.4% N=44	64.3% N=36	—
③退職後専業主婦	現在、仕事をしているが、将来は仕事を辞めて専業主婦になっている	2.0% N=2	3.6% N=2	—
④専業主婦継続	現在、専業主婦をしているが、将来も専業主婦をしている	—	—	13.3% N=15
⑤専業主婦後就業	現在、専業主婦をしているが、将来は仕事をしている	—	—	74.3% N=84
該当無し	その他、無回答など	2.0% N=2	3.6% N=2	12.4% N=14

注：分析に用いた項目を□で示した。

## 5. 育児不安の測定

母親の育児不安を測定するために、住田・中田（1999）が作成した「母親と父親の育児不安・肯定的感情」の22項目を採用した。回答は「かなり当てはまる」から「全く当てはまらない」までの4件法とし、「かなり当てはまる」4点から、「全く当てはまらない」1点まで、回答を点数化した。主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行い負荷量が.30未満の2項目は分析から除外した結果、4つの因子が抽出された。成分負荷量がマイナスの項目を逆転させた上で各項目を合計し、第1因子を「育児負担感」（7項目）（ $\alpha = .80$ ）、第2因子を「子どもの育ちへの不安感」（4項目）（ $\alpha = .88$ ）、第3因子を「自分の育て方への不安感」（5項目）（ $\alpha = .79$ ）、第4因子を「育児への否定感」（4項目）（ $\alpha = .72$ ）と命名した。

## 6. 自尊感情の測定

母親の自尊感情を測定するために、Rosenberg（1965）の自尊感情尺度を山本ら（1982）が邦訳した「自尊感情尺度」10項目を採用した。回答は「全く当てはまらない」から「かなり当てはまる」の4件法とし、「かなり当てはまる」4点から、「全く当てはまらない」1点まで、回答を点数化した。主成分分析を行い負荷量が.30未満の1項目を分析から除外した結果、1つの合成変数にまとまった。成分負荷量がマイナスの項目を逆転させた上で9項目を合計し、「自尊感情得点」（ $\alpha = .88$ ）とした。さらに、それぞれの就労形態ごとに「自尊感情得点」の平均点（Table3）で「高群」と「低群」の2群に分け、分析に用いた。

Table 3 自尊感情得点の平均点と高群・低群の分類

	フルタイム	パートタイム	専業主婦
平均点 (SD)	26.41 (5.02)	24.58 (4.44)	24.92 (5.23)
高群	N=60	N=31	N=67
低群	N=39	N=24	N=46

## 結果

### 1. キャリア選択の希望と自尊感情の関連

「キャリア選択の希望」の各群によって「自尊感情」に違いがあるのかについて調べるために、それぞれの就労形態ごとに一元配置分散分析を行った。有意な差が示

された場合は、下位検定（Tukey 法もしくは Dunnett 法）を行った。

その結果、「妊娠・出産時のキャリア選択の希望」について、フルタイムの母親においては各群による「自尊感情」の高さに差が示されなかった。パートタイムの母親においては、妊娠・出産時に「③退職後専業主婦」を希望していた母親の方が「④専業主婦継続」を希望していた母親よりも自尊感情が高いこと（ $F=2.75$ ,  $p<.05$ ）、専業主婦の母親においては、「④専業主婦継続」を希望していた母親の方が「⑤専業主婦後就業」を希望していた母親よりも自尊感情が高いこと（ $F=2.56$ ,  $p<.05$ ）がそれぞれ示された。

「将来のキャリア選択の希望」については、フルタイム、パートタイムの母親においては各群による「自尊感情」の高さに差が示されず、専業主婦の母親においてのみ、将来「④専業主婦継続」を希望する母親の方が「⑤専業主婦後就業」を希望する母親よりも自尊感情が高いことが示された（ $F=5.00$ ,  $p<.05$ ）。

## 2. 育児不安との関連

### (1) 就労形態による育児不安の違い

フルタイム、パートタイム、専業主婦といった就労形態によって「育児不安」の高さに違いがあるのかについて調べるために、一元配置分散分析を行った。有意な差が示された場合は、下位検定（Tukey 法もしくは Dunnett 法）を行った。

その結果、専業主婦の母親は、パートタイムの母親よりも「子どもの育ちへの不安感」が高いこと（ $F=3.57$ ,  $p<.05$ ）、フルタイムの母親よりも「自分の育て方への不安感」が高いこと（ $F=4.69$ ,  $p<.01$ ）がそれぞれ示された。

### (2) キャリア選択の希望と自尊感情の高低による育児不安の違い

母親の育児不安の高さがキャリア選択の希望、自尊感情によって違いがあるのかを調べるために、それぞれの就労形態ごとに、育児不安の下位尺度について「妊娠・出産時のキャリア選択の希望」の各群、「将来のキャリア選択の希望」の各群、「自尊感情」の高群・低群の3要因分散分析を行った。



フルタイムの母親：育児不安の「自分の育て方への不安感」( $F=14.99, p<.001$ )、「育児への否定感」( $F=9.89, p<.01$ ) それぞれに「自尊感情」の主効果が示され、自尊感情が低い母親の方が高い母親よりも育児不安が高いことが示された。「キャリア選択の希望」の各群による差は示されなかった。

パートタイムの母親：育児不安の「子どもの育ちへの不安感」において、「将来のキャリア選択の希望」の各群の主効果が示され ( $F=4.28, p<.05$ )、将来「②仕事継続・変更あり」を希望する母親は「①仕事継続・変更なし」を希望する母親よりも、育児不安として子どもの育ちへの不安感を高く持っていることが示された。

さらにパートタイムの母親にはいくつかの交互作用が示された。まず、パートタイムの母親の育児不安の「自分の育て方への不安感」において「妊娠・出産時のキャリア選択の希望」の各群と「自尊感情」の高群・低群に交互作用が示された ( $F=4.72, p<.01$ ) (Figure 1)。単純主効果の検定の結果、「自尊感情」が低群の母親においては、妊娠・出産時に「③退職後専業主婦」を希望していた母親の方が「①仕事継続・変更なし」、「②仕事継続・変更あり」、「④専業主婦継続」、「⑤専業主婦後就業」を希望していた母親よりも、育児不安として自分の育て方への不安感が高いことが示された ( $p<.01$ )。また、妊娠・出産時に「②仕事継続・変更あり」を希望していた母親 ( $p<.05$ ) と「③退職後専業主婦」を希望していた母親 ( $p<.01$ ) において、それぞれ自尊感情が低い母親の方が自尊感情が高い母親よりも育児不安として自分の育て方への不安感が高いことが示された。

次に、パートタイムの母親の育児不安の「自分の育て方への不安感」について、「将来のキャリア選択の希望」の各群と「自尊感情」の高群・低群との間に交互作用が示された ( $F=6.29, p<.05$ ) (Figure 2)。単純主効果の検定の結果、まず、「自尊感情」が高群の母親においては、将来「②仕事継続・変更あり」を希望する母親の方が「①仕事継続・変更なし」を希望する母親よりも育児不安として自分の育て方への不安感が高いことが示された ( $p<.05$ )。また、将来、「②仕事継続・変更あり」を希望する母親の中でも、自尊感情が低い母親の方が自尊感情が高い母親よりも、育児不安として自分の育て方への不安感が高いことが示された ( $p<.05$ )。

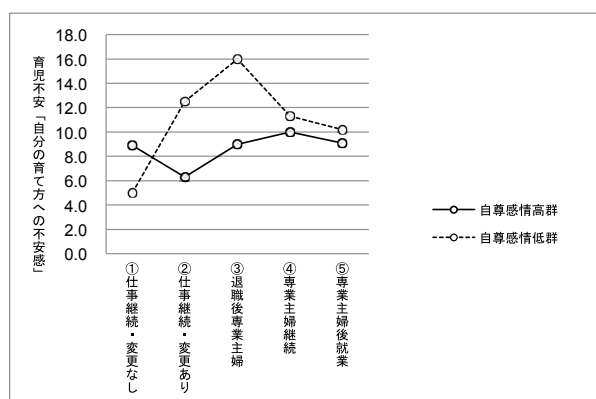


Figure 1 妊娠・出産時のキャリア選択の希望と自尊感情の高低による育児不安「自分の育て方への不安感」の交互作用（パートタイム）

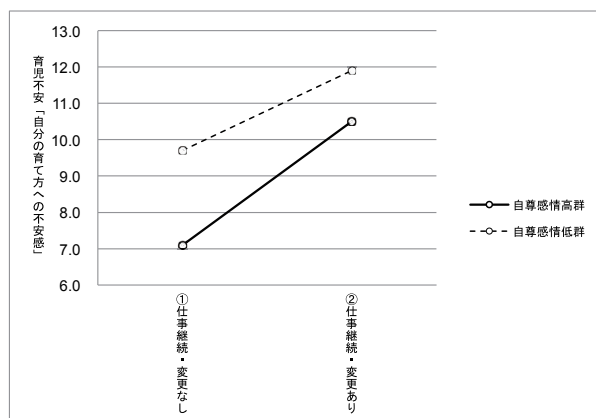


Figure 2 将来のキャリア選択の希望と自尊感情の高低による育児不安「自分の育て方への不安感」の交互作用（パートタイム）

専業主婦の母親：育児不安の「育児への否定感」において「自尊感情」の主効果が示され ( $F=5.66, p<.05$ )、「自尊感情」が低群の母親は高群の母親よりも育児不安として育児への否定感が高いことが示された。

「キャリア選択の希望」の各群による差は示されなかった。

## 考察

本研究では、育児期の母親の育児不安に関連する要因として、母親の内的要因としての自尊感情と、妊娠・出産や子育てに伴い流動的に変化する可能性を持つキャリア選択に関する希望を取り上げ、検討を行った。その結果、それぞれの就労形態におけるいくつかの特徴が明らかになった。

## 1. 就労形態による育児不安の違い

これまで、専業主婦の母親の方が有職の母親よりも育児不安が高いことを示す研究（宮本ら，2000 など）がある一方で、育児不安は母親の就労形態による違いが見られないとする研究（八重樫・小河，2002；富田・二宮，2014）が混在しており、一致した見解は示されていない。本研究では、育児不安の「自分の育て方への不安感」「子どもの育ちへの不安感」においては、専業主婦の母親の方がフルタイム、パートタイムの母親よりも高いことが示された。この理由として、本研究で用いた育児不安の尺度の項目は、“友人や知人が充実した生活をしているようなので、あせりを感じることもある”“育児雑誌や育児書、ネットと比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないかと思うことがある”など、母親が自分と周りの社会との比較の中で不安を感じることを表す項目が多くを占めていたことから、専業主婦の母親の方が陥りやすいと考えられる社会との関係性の薄さ、孤立感などに関係する内容の育児不安については、就労形態による差が出やすい可能性が考えられる。

## 2. 育児不安を規定する要因

本研究では、母親の育児不安を規定する要因として、母親の自尊感情と妊娠・出産時と将来の2時点におけるキャリア選択の希望についてそれぞれの就労形態ごとに検討を行った。

その結果、フルタイム、専業主婦の母親においては、自尊感情の高低による育児不安の差が示された。これは、母親の自尊感情は子ども・子育てへの肯定感と子育てへの否定感と関連することを示した先行研究（佐藤，2013）と一致する結果である。しかし、フルタイムと専業主婦の母親では、育児不安の内容が異なっており、フルタイムの母親では、育児不安の「自分の育て方への不安感」と「育児への否定感」がともに自尊感情の高さに関連したのに対し、専業主婦の母親では、「育児への否定感」のみが自尊感情の高さに関連した。このことから、就労形態によって自尊感情が影響する育児不安が異なる可能性が考えられる。本研究の結果から、母親の自尊感情は育児不安を規定する重要な要因である可能性が示唆されるが、育児期の母親の自尊感情を調べた研究はまだ非常に少ないため、就労形態によって自尊感情が与える母親の育児意識の違いについて、さらに検討する必要があるだろう。

また、フルタイムと専業主婦の母親については、キャリア選択の希望による育児不安の違いは示されなかった。この理由として、現在フルタイムの母親は妊娠・出産時、将来のキャリア選択の希望のどちらにおいても仕事をしたいと希望する母親が多く、キャリア選択の希望の各群の違いは、同じ仕事を続けるか条件等を変えて仕事を続けるかといった程度のことだったため、育児不安に差が出るほどの差異がなかったのかもしれない。専業主婦の母親については、先行研究（宮本ら，2000 など）と同様に、本研究でもフルタイムの母親よりも自分の育て方への不安感が高く、パートタイムの母親よりも子どもの育ちへの不安感が高いなど、有職の母親よりも育児不安が高いことが示されたことから、現在働いていないことが直接育児不安の高さにつながった可能性が考えられる。そのため、過去や将来のキャリア選択において、叶ったという肯定感や将来展望への期待感は、専業主婦にとって、目の前にある育児不安を取り除く要因になるほど大きな影響を与えなかったのかもしれない。

本研究では、パートタイムの母親においてのみ、育児不安におけるキャリア選択の希望と自尊感情の高群・低群の交互作用が示された。まず、自尊感情が低い母親においては、妊娠・出産時に退職後に専業主婦になることを希望していた母親の方が他の項目を希望していた母親よりも、育児不安として自分の育て方への不安感が高いことが示され、自尊感情が高い母親においては将来、条件等を変えて働き続けたいと希望する母親の方が、条件等を変えずに働き続けたいと希望する母親よりも、育児不安としての自分の育て方への不安感が高いことが示された。パートタイムの母親は、妊娠・出産時に「仕事を辞めて専業主婦になりたい」という希望を叶えられなかった場合、自尊感情が低い母親は自分自身の選択を肯定的に捉えることができず、そのような負の感情が混じり合って現在の育児不安の高さに関連したのではないだろうか。また、自尊感情の高い人は自分の力に自信を持ち、自分のことは自分で決定できている（Brockner & Elkind, 1985）ことから、母親においても、自尊感情が高い人は、自分のことは自分で決めたいと考えている可能性が考えられる。そのため、将来は今と違った仕事に就きたいと考えることが現在を否定的に考えていることの表れであり、そのジレンマが現在の育児不安に関連しているのではないだろうか。産褥期の母親の自尊感情の研究（渡邊・篠原，2010）では、自尊感情は

母親としての役割不全感と正の相関があることを示しており、自尊感情の高さが自分自身の不完全さに影響しているのかもしれない。フルタイムや専業主婦の母親とは異なり、パートタイム職は「自分の都合の良い時間（日）で働きたい」「勤務時間・日数が短い」といった理由で選んでいる場合が多く（厚生労働省，2011）、やりがいや内容へのこだわりなどよりは、本人の都合を叶えやすいことを第一とした就労形態であると言えるだろう。それに関わらず、フルタイムや専業主婦の母親以上にやりがいをもちにくいと、現状が不満であることはジェンマを感じやすく、育児不安に結びつきやすいのかもしれない。

さらにパートタイムの母親においては、妊娠・出産時に退職後は専業主婦を希望していた母親、および条件等を変えて仕事継続を希望していた母親、加えて将来は条件等を変えて仕事継続を希望する母親においては、それぞれ自尊感情が低い母親の方が高い母親よりも育児不安が高いことが示された。これらのキャリア選択の希望は、すべて現状から変化したいという希望であり、自尊感情が低い場合は大きなライフスタイルの変化にはうまく適応できないのかもしれない。

育児がひと段落した頃の女性の労働力率の再上昇がM字カーブの上昇となって表れているが、実際に増えているのはパートタイムなどの非正規雇用者である（内閣府男女共同参画局，2013）ことを考えると、パートタイムの母親のキャリア選択の希望、実現、自尊感情についてはさまざまな角度から今後も検討していかなくてはならないだろう。

## 総合考察

以上のように、本研究では育児不安を規定する要因として、自尊感情とキャリア選択の希望を取り上げて検討した結果、それぞれの就労形態ごとに様相が異なることが明らかにされた。フルタイムと専業主婦の母親においては、キャリア選択の希望による育児不安の差が示されなかったが、パートタイムの母親においては自尊感情とキャリア選択の希望の双方が組み合わさることで、育児不安の程度に差が出ることが示唆された。これは、就労形態によってキャリア選択の希望が異なることは当然であるが、単純なキャリア選択の希望だけでなく、そこに自尊感情という心理的な要因が影響することによって、どのようなキャリアであろうとも自分のキャリアを自信

を持って肯定的に捉えられるかに違いが生まれ、それが結果的に現在の育児状況の捉え方に反映していく可能性を示唆している。就労形態の違いは、仕事や育児に従事する時間や質の違いを生み出すだけではなく、育児期の母親の人生観を大きく表現している重要な物差しと言えるだろう。妊娠・出産、そして子育てがひと段落する時期という母親にとっての重要なタイミングに、「働きたいのに働けない」「育児に専念したいのに働かなくてはいけない」「将来はきっと自分の希望通りになっているはず」などのキャリアに関連する母親の思いを検討することは、今後も進めていかなければならない重要な問題であると考えられる。

## 謝辞

本研究は、2016年3月に横浜国立大学大学院に提出した修士論文の一部を修正・加筆したものです。調査にご協力いただきました幼稚園、保育園関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- ベネッセ教育総合研究所（2015）第5回幼児の生活アンケート 速報版
- Brockner, J., & Elkind, M. (1985) Self-esteem and reactance: Further evidence of attitudinal and motivational consequences. *Journal of Experimental Social Psychology*, 21, 346-361.
- Crnic, K.A., & Booth, C.L. (1991) Mothers' and fathers' perceptions of daily hassles of parenting across early childhood. *Journal of Marriage and Family*, 53, 1042-1050
- 加藤悠・中島美那子（2011）母親の自尊感情と養育態度：子どもの自尊感情を育むために．茨城キリスト教大学紀要．45, 人文科学, 119-129
- 菊地ふみ・柏木恵子（2007）父親の育児：育児休業をとった父親たち．文京学院大学人間学部研究紀要, 9, 1, 189-207
- 厚生労働省（2010）第1回21世紀出生児縦断調査（平成22年出生児）の概況
- 厚生労働省（2011）平成23年パートタイム労働者総合実態調査の概況
- 厚生労働省（2014）平成25年度育児休業制度等に関する実態把握のための調査研究事業報告書

- 厚生労働省(2015) 第13回21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)及び第4回21世紀出生児縦断調査(平成22年出生児)の概況
- Kugle, Clements, & Powell (1986) Level and stability of self-esteem in relation to academic behavior of second graders. *Journal of Personality & Social Psychology*, 44, 201-207.
- 牧野カツコ(1982) 乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉. 家庭教育研究所紀要. 3, 34-56
- 宮本政子・舟越和代・中添和代・時岡恵美・森美代子・渋谷幸彦(2000) 乳幼児を持つ母親の育児不安の現状とその要因. 香川県立医療短期大学紀要. 2, 115-121
- 内閣府(1996) 国民生活白書 平成18年版
- 内閣府男女共同参画局(2013) 男女共同参画白書 平成25年版
- 酒井厚・松本聡子・菅原ますみ(2014) 就労する母親の育児ストレスと精神的健康: 職場も含めたソーシャルサポートとの関連から. 小児保健研究. 37(2), 316-323
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則(1994) 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理学研究. 64(6), 409-416
- 佐藤淑子(2013) 育児期家族の生活と心理. 鎌倉女子大学紀要. 20, 1-10
- 園田菜摘(2012) 母親の育児不安に関する研究: サポート、子どもの気質、養育行動との関連. 横浜国立大学教育人間科学部紀要. I, 教育科学 14, 41-47
- 菅佐和子(1984) SE (self-Esteem) について. 看護研究. 17(2), 117-123
- 住田正樹・中田周作(1999) 父親の育児態度と母親の育児不安. 九州大学大学院教育学研究紀要. 2(45), 19-38
- 高橋桂子・佐野綾香(2010) 父親から母親への情緒的サポートが母親の育児不安の緩和に及ぼす影響. 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編. 2(2), 165-170
- 富田早苗・二宮一枝(2014) 乳幼児期における母親の就労希望と育児負担感との関連. 小児保健研究. 73(2), 308-315
- 渡邊香・篠原ひとみ(2010) 産褥一ヶ月時の母親の育児不安と Self-Esteem との関連. 秋田大学医学部保健学科紀要. 18(2), 1-9
- 八重樫牧子・小河孝則(2002) 母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究. 川崎医療福祉学会誌. 12(2), 219-239
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982) 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究. 30(1), 64-68